令和８年度

学校経営方針

令和８年４月１７日

文京区立茗台中学校

はじめに

「１５歳の春を笑顔で迎えるために」―これは中学校教育が目指す目標であり、人生における大切な通過点の１つを表す言葉です。義務教育の集大成として、３年間の学びを終えた生徒たちが、素敵な笑顔と誇りをもって自ら選んだ道へ旅立てるよう、私たちは全力で子供たちに関わり、その使命を果たしてまいります。

中学生時代は、心身の激しい変化とともに、人間関係も広がり、葛藤しながら成長していく「人生で最も強烈に輝く時期」です。この時期の子供たちは、時に悩み、もがきながらも、大人を越えようと必死に自分を磨いています。私たちは、学校を多様な関わり合いを通して「探究知を育てる経験の空間」と定義しました。人生を豊かにする「優れた本」「旅」「人との出会い」を大切にし、成功だけでなく、多くの失敗体験さえも「次に成功するための大切なデータ」として分かち合える、温かくも挑戦的な学び場を創りたいと考えています。また、私たち教職員も成長し続ける子供たちとの関わりの中で、教職員として、また人として成長する実感を味わえることは、中学校の教職員という職業の最大の魅力であると考えます。

本校が掲げるミッションは「豊かな共生社会の実現」です。多様な考え方に触れたときに「あなたはそう考えるのだね。でも、私は違う」と、自分と違う存在を否定せずに受け止める。そんな「笑顔・共感・創造」のある学校づくりを通じて、生徒一人一人の自己肯定感を高め、自己実現を促し、社会的自立を支援します。

１５歳の春は、自分の進むべき道を自ら決定し、広い世界へ旅立つ人生で最初の大きな岐路です。私たち大人は、子供たちのこの成長に適切に関与しつつ、理不尽な力のぶつかり合いではなく、大人への健全な成長の姿として、子供たちが越えるべきハードルとしてうまく越えさせてあげることが役目であると考えます。努力によって、目標としていた大人を越えていくことの積み重ねの中で、真の学力や体力、精神力が育まれるものと考えています。

令和８年度は、新たに「学校運営協議会」を設置し、学校を地域社会の一部として再定義する変革の年です。学校の課題を地域（ヒト・モノ・コト）と共有し、保護者の皆様や地域の方々と共に解決していく、「地域に開かれ、期待の一歩先いく学校」へ向けた歩みを進めてまいります。

「正道を歩む」「よきヒトづくり」「絶えざる革新」を胸に、全教職員の英知を結集し、生徒の未来を拓く教育を積極・果敢に推進してまいります。

皆様のご理解と力強いご支援を心よりお願い申し上げます。

令和８年４月

校長　島山　繁善

1　目指す学校づくりに向けて

（1）目指す学校づくりにおいて、よるべき根拠

○　学習指導要領　諸答申（育成すべき資質・能力の三つの柱）

○　東京都教育ビジョン

○　文京区教育委員会　教育ビジョン・教育目標

（2）教育目標

○　自ら考え、学習に励む人

○　思いやりと自主自立の心をもつ人

○　心も体もたくましく、進んで行動する人

（3）育てたい生徒像

社会の変化に対応する力を身に付けられるよう、継続して物事に取り組むことのできる生徒

○　「問い」を立て、粘り強く学び続けるとともに、学んだことを発信できる生徒

○　多様性を尊重し、優しさをもって人と接することができる生徒

○　グローバルな視点で世界を見つめ、地域社会に貢献できる生徒

（4）学校の在り方

輝く茗台中　共に成長する茗台生　～笑顔・共感・創造のある学校～

○　一人一人が自ら学び、考え、判断し、表現する力を伸ばせる学校

○　互いに認め合い、支え合い、高め合い、豊かな人間関係を築ける学校

○　よりよい社会を築くため、考え行動する態度を育む学校

2　学校経営の基本的な考え方

文京区教育委員会が策定した「教育ビジョン　～個が輝き共に生きる文京の教育～」の具現化を目指し、本校のこれまでの66年間の歴史と伝統、現在の生徒・保護者・地域の実態を踏まえ、教育目標「自ら考え、学習に励む人」「思いやりと自主自律の心をもつ人」「心も体もたくましく、進んで行動する人」の達成に向けた教育を推進する。

また、「輝く茗台中　共に成長する茗台生～笑顔・共感・創造のある学校～」の下、MVV を以下のとおり策定する。

～MISSION～

豊かな共生社会の実現

～VISION～

地域（ヒト、コト、モノ）をよく理解し、期待の一歩先いく学校

学校は地域社会の一員という認識の下、地域資源（人材、行事、施設など）への理解を深め、地域と学校の融合を推進し、地域の期待の一歩先行く教育を実現していく

～VALUE～

正道を歩む

根拠を追求し、今できることにひたむきに取り組む

よきヒトづくり

子供も教職員も共に認め合い、学び合い、高め合う

絶えざる革新

常にこれでよいのかと振り返り、改善・改革する

これらを実現するために、次の3点を重点事項とする。

（1）安心して失敗し、挑戦できる環境づくり

（2）対話と笑顔の関わり合いの醸成

（3）学び、磨き続ける「探究知の空間」づくり

3　中期的目標

（1）安心して失敗し、挑戦できる環境づくり

○　失敗を「次に成功するための大切なデータ」と捉え、学習や行事において、自ら決めた目標に果敢に挑戦し、そのプロセスを互いに称賛し合える生徒を育成する。（自己受容・自己効力感の向上）

○　結果の成否にかかわらず、試行錯誤のプロセスを可視化・共有する仕組みを構築し、生徒の心理的安全性を保障する。（自己有用感の向上）

（2）対話と笑顔の関わり合いの醸成

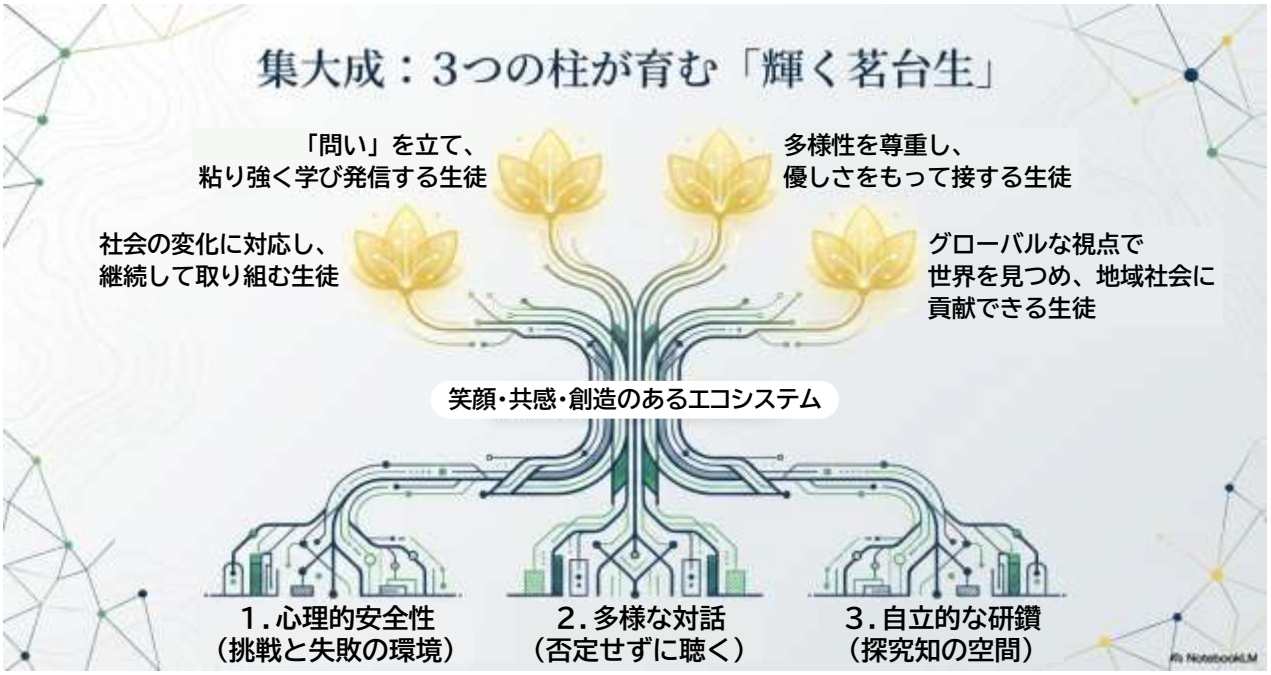
○　「否定せずに聴く」ルールを基盤に、他者の異なる意見を自己の成長の糧（データ）として取り入れる対話的な学びを実践し、多様性への理解を深める。（自己受容の促進）

○　地域を「探究の旅先」と捉えた主体的な関わりを通じ、多様な生き方に触れ、地域社会に貢献する喜びを実感させる。（自己有用感・自己効力感の向上）

（3）学び、磨き続ける「探究知の空間」づくり

○　教職員が「本・旅・人」を通じた自己研鑽を習慣化し、失敗を共有し合う対話的な研究を通じて教育の質を高める（プロ意識の変革）とともに、その姿勢を生徒に示し、自らの課題を客観的に把握して、自律的に学びを深める姿勢を養う。

○　業務を教育の目的の視点で再定義し、削減した時間を生徒と向き合い、自らを高めるための時間に充てる。（職場環境の構築）



4　令和8年度の達成目標と具体的方策

(1) 安心して失敗し、挑戦できる環境づくり

【達成目標】

○ 失敗を「ダメなこと」ではなく「次に成功するための大切なデータ」と捉え、学習や行事、自己管理において、自ら決めた目標に果敢に挑戦する生徒を育成する。

○ 全ての教育活動において、結果の成否のみならず、試行錯誤のプロセス（データ活用）を評価・共有する仕組みを構築し、生徒の心理的安全性を保障する。

○ 困難に直面した際や心身の不調を感じた際に、自らの状態を客観的に把握し、他者に助けを求めたり、計画を修正したりしながら笑顔で立ち直る力を育てる。

【具体的方策】

○ 各教科のワークシート等に試行錯誤の記録として、「今回試したこと（挑戦）」と「そこから得たデータ（失敗や気付き）」の記入欄を設けるなどして、結果だけでなくプロセスを可視化できるようにする。

○ 総合的な学習の時間において、成功事例だけでなく「どのように失敗し、どのようにデータを活用したか」を共有する中間報告会等を授業計画に位置付ける。

○ 生徒が自身の健康状態（体温、睡眠、気分等）をデータとして捉え、自律的に生活リズムを整えられるように科学的根拠に基づく指導を行う。

○ 行事の運営を生徒による実行委員会などに大胆に任せて、未知の自分や仲間と出会う「旅」として取り組ませ、失敗も含めて「自分たちの手で輝く茗台中を造りあげる」誇りを実感させる。

○ 保健室や相談室を、生徒が困った時にいつでも、心を休め、頼れる場所として機能させる。

○ 全ての教育活動において、「失敗しても大丈夫」というメッセージを伝え続け、挑戦した生徒を全員で称える文化を醸成する。

○ 生徒が「計画の修正」を行った際に、そのことを「挫折」ではなく「賢明な判断」として評価する教職員の意識を醸成し、挑戦に向けた意欲を持続できるようにする。

（2） 対話と笑顔の関わり合いの醸成

【達成目標】

○ 「否定せずに聴く」ルールを基盤に、他者の異なる意見を自己の成長の糧（データ）として取り入れる対話的な学びを全ての教育活動で実践し、思考力と多様性への理解を深める。

○ 地域を「探究の旅先」と捉えた主体的な関わり（調査・貢献・交流）を通じ、多様な生き方に触れることで固定観念を打破し、地域社会の一員としての自覚と自己有用感を高める。

○ 性・障害・文化等の違いを尊重し合い、生徒も教職員も誰もが笑顔で自分らしく過ごせる、心理的に満たされた環境（ウェルビーイング）を実現する。

【具体的方策】

○ 全ての授業において、自身の考えを述べた後、他者の異なる意見を「新たな視点（データ）」として取り込むペア・グループ活動を設定して、対話の質の向上と思考の深化を図る。

○ 教科等の学習内容に関連する図書を活用し、自分の考えを構築・論証するパフォーマンス課題を設定し、客観的な根拠に基づき自分の考えを構築する力を養う。

○ 性や障害、文化の違いを互いに認め合い、全ての授業の冒頭で「否定せずに聴く」ルールを徹底するなど、笑顔で発言できる環境を構築する。

○ 困難に直面した際、仲間と支え合い、前向きに立ち直るためのストレスマネジメント指導を特別活動等に取り入れる。

○ 行事後の「笑顔のメッセージ交換」等により、他者の健闘を称え、自分自身の貢献を実感できる仕組みを整える。

○ 地域における調査活動や行事参画を通じて地域（ヒト・モノ・コト）への理解を深め、地域社会に貢献しようとする意欲を育てる。

○ 地域資源や外部講師の講話に読書を組み合わせ、未知の世界や多様な人生観に触れさせることで固定観念を打破する。

○ 教育活動を HP や学校・学年便りを通じて積極的に発信し、保護者・地域との「笑顔の信頼関係」を深める。

○ 慣例の行事や会議を「生徒の笑顔」に直結しているか精査し、勇気をもって「やめる・変える」を実践する。

○ 個別面談等で生徒の主張を「あなたはそう考えるのだね」と肯定的に受け止める姿勢を、教職員自らが範として示す。

○ 教職員が、適切な負荷と休息のバランスを意識し、肉体的にも精神的にも社会的にも満たされた状態で生徒に向き合えるようにセルフケアを心掛けるとともにラインケアの体制を整える。

（3）学び、磨き続ける「探究知の空間」づくり

【達成目標】

○　生徒が自らの課題を客観的なデータで把握し、社会とのつながりや目的意識をもって自律的に学びを深め、自分自身を磨き続ける姿勢を養う。

○　教職員が「本・旅・人」を通じた自己研鑽を習慣化し、失敗をオープンに共有し合う対話的な校内研究を通じて、教育の専門性を高め続ける組織文化を醸成する。

○　全ての校務を教育の目的の視点で再定義し、形骸化した事務作業や活動を大胆に削減することで創出した時間を生徒一人一人と向き合う対話や、自身の専門性を高める研鑽に充てる。

【具体的方策】

○　AI ドリル等のデジタル学習基盤を活用し、生徒自身が自分の改善点を把握し、自律的に学習する機会を保障する。

○　単元の導入で「この学びが社会のどこで人を笑顔にするか」などといった目的意識を提示することにより、学習意欲を喚起する。

○　ネット等の不確かな情報ではなく、専門的な知識（優れた本や人の知見）に基づき、正しい判断ができる情報リテラシーを身に付けさせる。

○　行事や日常の委員会・係活動を「自分を磨く旅」と捉えさせ、責任ある役割を果たす中で自己有用感を高められるようにする。

○　既存の教育活動や事務作業をこなすだけの作業に終わらせず、教育の目的に照らして再定義し、意義の薄い活動を削減することで、授業準備や研鑽の時間を創出する。

○　教職員同士が「本・旅・人」の経験を語り合い、互いの専門性を磨き合う対話型研修を取り入れ、新たな視点を得、識見を深める。

○　若手からベテランまでが、自身の成長や悩みを笑顔で語り合える「ミニ対話タイム」を意識的に取り入れ、心理的安全性が担保された環境を整える。

○　校内研究で「公開授業での挑戦と失敗」をオープンに共有する文化を創るとともに、長期休業中の自己研鑽（インプット）の成果を授業改善等に反映させる。